

2024年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書			2025/9/30
団体名	一般社団法人てこぼこ	活動タイトル	発達障がい児向け体験プログラムの実践と博物館向け運営ガイドの作成
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■活動風景
●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	7年間のワークショップの知見を活かした運営ガイドをきっかけに、全国の博物館で発達障がい児に向けた取り組みがはじまる。ニーズを聞き取るためのあるいは学校教育連携担当と同じように福祉担当の職員が置かれている。すべての子どもたちへの自然科学や地域の文化に対する体験、関心の場が作られ運営されている。		
●団体の社会的役割(ミッション)	市民が標本作りを通して博物館を支援すること、標本の科学的な役割を普及すること、博物館を社会にひらき親しみやすいものにすることを目的に活動するサークル「なにわホネホネ団」から派生した団体として、博物館に関心をもつすべての人が博物館を自分の社会資源とし、活動に参加できるよう、福祉業界と博物館業界の橋渡しを行う。		
●団体の活動基盤	●望ましい人的資源：参加者の精神状態、心理状態に関する専門知識を持った複数名のメンバーが、当事者からの相談や福祉的な配慮に基づいた対応をしつつ、ワークショップ参加者に博物館への知識を伝えられる。また、他の博物館からの相談に対応できる。 ●望ましい物的資源：活動の拠点となる空間があり、各個人に合わせた楽しみ方(感覚の使い方)ができるワークショップの空間や道具の提供ができる。 ●望ましい活動資金：参加者の学びやすさ、あるいは経済状況に合わせて、投入できる予算を独自で持っている（障害者手帳があれば参加無料など）。スタッフの人員費を支出でき活動が持続可能になっている。 ●望ましい情報：子どもの学びや発達に関する専門家や団体と連携できていること。定期的な勉強会の開催や最新情報に触れるための学会や研究会への参加が定期的に行える。活動に関心のある他館種の博物館関係者と情報交換ができる。		
■活動報告		■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)	
①今年は博物館から障がい児者への具体的な取り組みに向け、その方法や悩みといった声が増えた。博物館関係者の前進を感じている。 ②研修会講師依頼3件(博物館系2件、福祉系1件)、執筆依頼4件(学校教育関係2、科学博物館系、書籍)。博物館関係者の中での当団体の知名度は上がっている。③福祉関係者にも啓発を行う機会が増え、問い合わせが増加(概要への問い合わせ、プログラムへの問い合わせ等) ④ボランティアメンバーは23名になり、福祉工学を専攻する学生からの見学もあった。 ⑤八尾市では初めて歴史・考古学系博物館で金属鋳造のWSを実施。企画段階から博物館職員、金属鋳造を専門とする技術者にも入っていただき、それぞれの専門性を活かしたプログラムを作れた。参加者満足度も非常に高かった。当日はアンケートにより障がい特性を把握し、それぞれの具体的な反応を回収することもできた(修士論文としてメンバーの一人がまとめる予定)。博物館を通じ、地域の社会資源としての「専門家」(今回は金属鋳造)と当事者の子どもたちをつなぐという新たな視点が得られたことは、最大の収穫である。		①活動の啓発：大阪市「大阪自然史フェスティバル2024」に出展(来場者22,500人)。活動の啓発ブースを前面に出したことで、福祉専攻の学生の目に留まり活動を見学につながるなど具体的な成果／今まで手薄だった福祉系支援者への啓発に力を入れ、大阪市住之江区自立支援協議会で活動のプレゼン(参加者は相談支援専門員約30名)／奈良県橿原市「虫まつり」に出展(来場1,347人)パンフレット配布／大阪市東住吉区「2/15もくれんマルシェ」「7/12子どもマルシェ」に出展(来場約300人)／全国科学博物館協議会 全科協ニュース vol54,no6「特集：インクルーシブ・ミュージアム」に寄稿／岸和田市教員委員会・きしわだ自然資料館発行「From M」93号に掲載(3000部＋オンライン)／『障害と向き合う美術館』（水曜社）に掲載。 ②研修の企画開催：目標年3回→3回達成。 ③ワークショップ開催：全12回開催。同じ内容のWSを場所や規模を変えて行うことでさまざまな環境に対応できるスキルを身に着けた。これまでなかった歴史・考古学系博物館や水族館での開催も行った。 ④(活動基盤の強化)：ホームページの制作に思ったより時間がかかり、アンケートの回収には至らなかった。	
■事業を通じて得られたノウハウ		■望ましい社会状況を達成するための課題	
今までは発達障がい児に対する対応をメインで考えてきたが、活動が続くにつれ集客や広報なども気を配る必要がでてきた。八尾市での集客ができず延期になった反省から、今まで活動をしていなかった地域でのイベント実施は、地域の福祉体制によって広報戦略を変える必要があり、まずはそれを調べるところから始めないといけないことを学んだ。また、博物館関係者の中での福祉の意識の高まりとともに、障がい者を優遇することに対して逆差別にあたるのではないかなどの思いや悩みなども聞くことができ、意見を交わす機会が増えたことで双方の理解につながったと感じる。リピーターになっている発達障がい当事者の小学生男子がWS参加後に絵日記を送ってくれ、母からも感謝のメールが届くなど、広く多くの人にも大切であるが、確実に発達障がい者個人へ届けるといったことも今後のWSを開催するにあっての私たちの活動の在り方を考えるきっかけになった。		■活動成果のアピールポイント（自由記入）	
		この1年間の活動を通じて	さまざまな館種の博物館、学芸員、技術者との連携により、当事者の子どもたちへの支援の可能性を広げたこと
		を達成しました。	
■受益者の具体的な変化（自由記入）			
wsの開催や公式ライングループでの発信を通じ、リピーターさんとの継続した関係性、信頼性が高まった。「博物館で好奇心を刺激されたり、学ぶ」という過ごし方に慣れてきた様子が見られた。			